障がい者雇用ではなく人として雇用することで彼らの能力を爆発させるもの凄い会社が大阪にあった。

巻頭特集

株式会社 あじみ屋

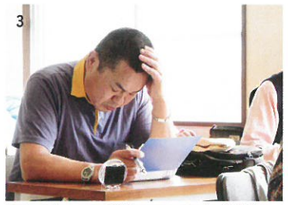
大阪府・松原市

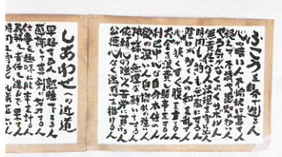
まるで学校のような衝撃の職場シーン

陽の光が心地よく差し込むお昼どき、若い女の子から結構年のいった男性まで幅広い年代の人が長机に座ってテストを受けている。みんな真剣でとても勉強に集中しているが、ここは学校や塾の教室ではない。大阪府松原市にある［株式会社 あじみ屋］という会社の図書室。そして、必死にテストを受けるのはみんな障がいのある従業員だ。ホワイトボードの前に座り、一枚一枚丁寧に採点する人は社長の清水さん。ちなみにこの勉強会は6年ほど前からはじまった。「計算くらいできるようにならなあかん」という社長の考えでスタートしたそうだ。それから毎日毎日、みんなの仕事が終わる昼すぎから欠かさず勉強会は行われている。いま勉強会の内容はテスト問題が中心。ちなみにテストの問題はなんと、調理師免許の国家試験用の参考書から出題し、彼らに解いてもらっている。

これは障がい者雇用が進んでいるとかいうレベルを超えている。おそらくこんなことを障がいのある人にさせている会社は、日本いや世界でもここだけではないだろうか。彼らについて清水社長は、「特別なことをしているわけじゃありません。彼らがやりたいと言うから、私も協力してやっているだけです。将来は本当の国家試験を受けさせて調理師免許をとってもらおうと思っています。免許をとることができれば、われわれが管理をしなくていい、彼らだけで働き、給料をもらうことができるようなシステムをつくってみようと考えているんです」。人を大切にし、人のやらないことに挑戦する稀有な会社の職場風景である。

1 みんながやってきたプリントや学習帳の束。小学生レベルのものを丁寧にやっている。
2 相当勉強してきたことがわかる、使い込まれた調理師免許の国家試験の参考書。漢字にはふりがながふられている。





3 頭をかかえながらテストに取り組んでいる。真剣そのもの。 4 真っ白な紙に書いたひらがなを見て漢字を書く勉強をする従業員。こんな勉強が6年ほど続いてる。 5 食事をしながら、やっていることについて楽しそうに話している。学校の昼休みを思い出す、アットホームな雰囲気。みんな活き活きとしている。ひとりの女の子は仕事が上手くいかず会社を辞めたが、社長が彼女のために勉強会だけ呼んで参加している。 6 心ある標語。

Special selection

「柿の葉すし」でその名を轟かせる

［あじみ屋］は1978年創業。食品製造・販売を中心に、事業所・病院・福祉施設向け献立の提案、レシピ作成、食材の販売、ドライブイン・日本料理店の経営など食生活に関する様々な事業を展開する会社。特に主力商品である柿の葉すしは、［柿千］という名で営業し、阪急うめだ本店、JR大阪駅、京都駅構内といった一級の売り場で取り扱われているほど味がいい。その名を聞いたことのある人、商品を食したことのある人もいるのではないだろうか。柿の葉すしで有名旅行情報誌や週刊誌にとりあげられるほどの名企業だが、実は清水社長を中心にノーマライゼーション経営に尽力する会社であるということは商品ほど知られていない。

30年近く障がい者を雇用

障がい者の雇用は創業間もなく25年以上行っており障がい者雇用をする企業としては「老舗」といってよいほど歴史がある。清水社長とともに雇用を推進してきた滝沢部長は、「最初は近所の学校の生徒さんの面倒をみたことがきっかけだったそうです。私はずっと金融↘

1 箱折りの作業場。ここは障がい者がメイン。職場ではやはり「殴った」とか「ものをとった」とかトラブルはあるが、障害者職業生活相談員の資格を持った人や、職場の「おかあちゃん」的存在である年配のパートさんが間にはいり解決している。 2 昼休憩。この時間に勉強する障がい者も多く、その場合は女性の事務員が自主的に中に入り教えている。 3 鯖の骨抜き。速さと精度が問われる作業も障がいのある人が行っている。 4 滝沢部長。 5 商品見本。多くは契約した農家や企業から安心・安全で質のよい食材を仕入れ手作りしている。

機関で働いたのですが、55歳の時にあじみ屋で働くことになりました。来て驚いたんですが、職場で障がい者が健常者と一緒に働いているんです。私は電車の中で奇声を発している人とか別世界の人だと思っていましたから。当時なんか前職である金融機関をはじめ、ふつうの企業なんてほとんど障がい者を雇用せずに、国に罰金払っていましたよ。しかしその時から社長は言っていました。『この子ら20歳過ぎたら年金もらっているみたいなんや。その年金とうちの給料を合わせたらなんとか自立できるんちゃうか』と。最初はなに言っているかわからなかった。しかし、しばらくすると、彼らの仕事に向かう姿勢のひたむきさに私たちのほうが教えてもらうことが多いということに気づき、社長の言うことを理解しました」。

それから、ハローワークや障害者就業・生活支援センター、特別支援学校と連携をとりながら雇用数を地道に増やし、現在32名の障がい者が働く。作業内容に関して、シュレッダーとかコピーといった単純作業をたださせるのではなく、看板商品の柿の葉すしに使われている寒鯖の骨抜き、箱折りなど、経験と技術を要する作業を行ってもらい、利益を生むための戦力として働いてもらっている。↙

年齢を理由に退職させたことなし

［あじみ屋］は障がい者雇用だけではない。滝沢部長は実は御年72歳。「あまり公にしていなかったんですが、従業員数350人くらいの中で70歳以上が14人、65歳以上は44人、60歳以上は140人くらいいます。というのは、社長は創業以来年齢を理由に従業員を退職させたことがないんです。さすがに70歳をすぎた人は社長に辞表をだすんですが、社長は必ず止めるんです。ほかにも、仕事で柿の葉すしを詰めた箱を運ぶ作業があるんですが、1箱10kg以上になります。歳をとると持てなくなる人も出てくるじゃないですか。それでも社長は『まわりにいる人が持ったらええやないか。他のできることやってもらえ』というんです（笑）」。

普通なら事業が上手くいっているのか疑問に思うが、業績はこの不況下でも好調で、特に柿の葉すしをはじめとした食品の通販の'12年の売上は前年に比べ2倍近くになっている。これは社長の考えのもと、障がいのある人、年を重ねたベテラン従業員が一生懸命に働き、それに感化された若い社員が彼らを助けながら自主的に努力する良い職場環境が生まれ、品質の維持とアップにつながっているからに他ならない。↘

1 餌やりの風景。ダチョウ農園は［日本ダチョウ農園］という名で、あじみ屋の100%子会社である［株式会社 あじの木］が運営する。 2 飼料置き場。すべて自家農園や、提携農業法人で栽培した自然素材でつくられる。これほど飼料にこだわるのは全国的でも稀。ここで産まれた卵は一般的に流通するものよりも大きく栄養価も高い。 3 ダチョウは穏やかな性格も特徴。 4・5 施設長の幸阪さん。奥さんと、障がい者スタッフ1名の計3名で農園をみている。 6 広大な園内でストレスなく育てられていることも、高い品質の理由だ。

注目の新事業はダチョウ農園

［あじみ屋］は新事業をはじめた。それはなんとダチョウ農園の経営だ。3年前に飼育方法を1から学び、いまでは200羽以上のダチョウを飼育。日本一のダチョウ農園を目指す。なぜダチョウ農園なのか。それは食の安全が問われる現代において、食品を長く扱ってきた経験から、社会に貢献できることを考えた結果なのだそう。ダチョウは低カロリーで栄養価の高い食肉の利用はもちろん、卵に関しても鳥インフルエンザなどの新型ウィルスの抗体をつくることのできる材料として注目されている。ここで生まれたダチョウの卵を研究機関に利用してもらう予定もあるそうだ。

従来の枠にはまらずに、30年以上信じた経営を続ける［あじみ屋］。一朝一夕でできるものではない。

株式会社 あじみ屋

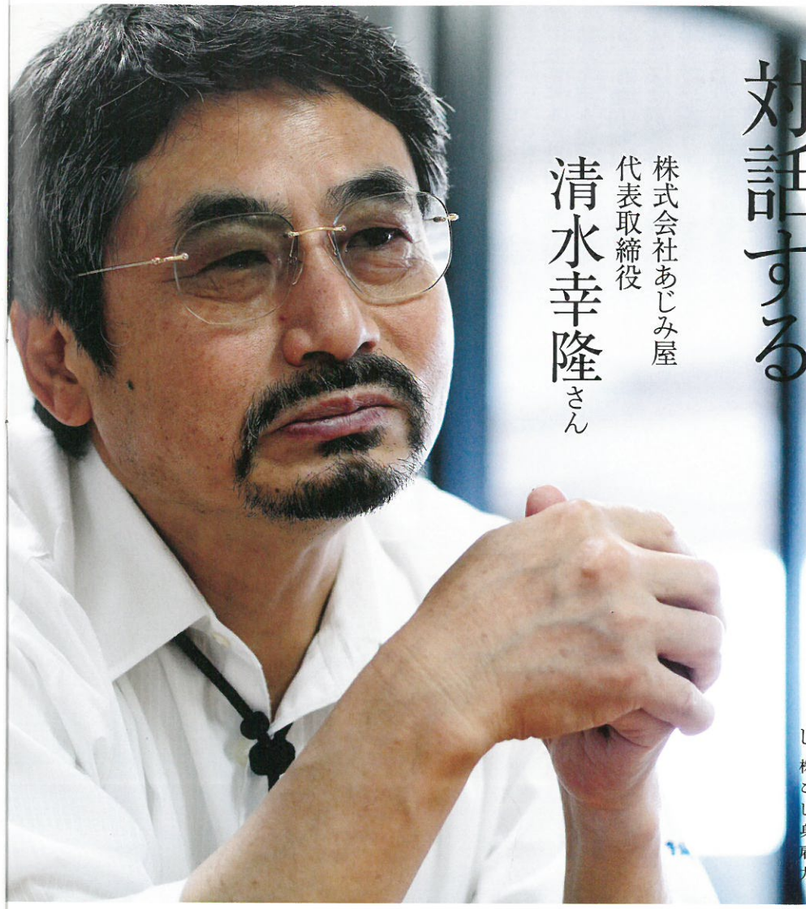
本社は大阪府松原市。大阪では障がい者雇用に尽力する経営者から一目置かれる、知る人ぞ知る会社。2008年には大阪府下の素晴らしい会社に贈られる「大阪府ハートフル企業大賞」を受賞している。看板の柿の葉すしは、奈良県天川村の名産品がルーツ。通販もやっているので障がい者雇用関係なしに一度お試しを。

公式URL　http://www.ajimiya.co.jp/

特集 Interview

障がい者ではなく「貴世満」と呼び彼らと真剣に対話する

株式会社あじみ屋
代表取締役
清水幸隆さん



しみず ゆきたか

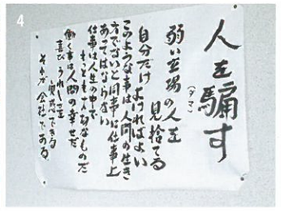
株式会社あじみ屋の代表取締役社長。一代で会社をここまでにした。今も障がいのある人たちと最も密に接し、ほかの社員に行動で会社の在り方を示している。自身も半身不随に近い病を患ったことがあり、その経験が雇用に活かされている部分もあるとか。自社の経営に尽力しているので、基本的に講演会などは行っていない。

補助金なんていらない

会社で働く人がお金だけでなく、世の中になにができるか本気で考えたとき、会社を形成しているのは人間なのに会社が人間を選んでいる。要するにコスト重視の社会がコストに見合わない人たちを勝手に障がい者と決めつけているということです。それに対し国が申し訳ないと金だけ渡してなんとかしてくれということになっている。このシステムがずっと続いてきてこれからも続くのか、正解なのか。たまたま健常者なだけでいつ障がい者になるか分からん人間が、「俺は何でもできるけど、お前らは頭トロいし動きも悪い。障がい者やから障がい者の檻に入っとけ。こっちきたら具合悪い」としてるんじゃないんかと。本当はみんなやればできるのに社会はそれをやらさない。同じように働いてもらい、それに見合った給料を払うことがそんなに難しいのか。汗水流してお金を稼ぐのと、お金が落ちてくるのを待つのとでは人としての尊厳、あり方が絶対に違う。そもそも補助金あるのがおかしい。だからうちは補助金なんて意味のわからんお金はいりませんし、もらってない。私たちの会社では障がいのある人たちを「障がい者」と呼ばずに「貴世満（きよみつ）」と呼んでいます。〝貴世満〟という意味で、「株式会社 あじみ屋」を貫く理念でもあります。

国家試験への道

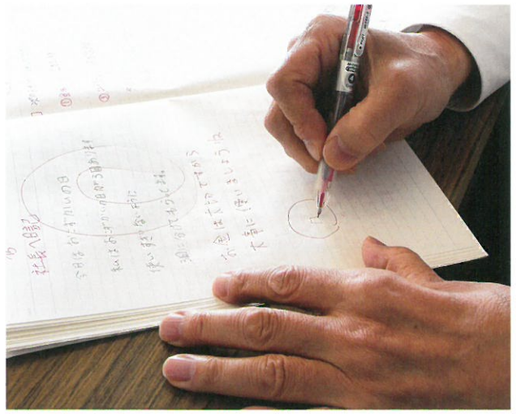
十年以上前に50歳を超えた従業員の親御さんが病気になり、その子が一人で暮すことになり大変困ったんです。その子は結局福祉施設に行き、面倒みると言っていただけに心にしこりが残りました。そこで彼らの両親がずっと健在ではないんだと気づかされました。もし彼らの境遇になったとき、買い物すらできんのにどうして生活するのか。「自立」という大目標を掲げ、細かいこと教えないといけないと思ったんです。それから買い物に行かせて料理を作るということをやらせてたんですが、計算できない子が多かった。お釣りが分からなければ相手任せになるでしょ。2桁くらいの暗算はできるようにと、ドリルを買ってきて100マス計算をやらせたんです。1年すると電卓使わんようになりました。毎日やるから停止してた脳が動いてくるんですね。1ヶ月ではだめ。2年、3年しないと。彼らの頭は今までの環境から20年、30年止まってたからちょっとじゃ動かないんです。1年で動いてくれたら早いんじゃないですか。



1 みんなで参考書を復習している。モチベーションが高い。　2 漢字の練習。小学生が使う漢字練習帳を使っている。その書き方から丁寧にやっているのがわかる。
3「今回は前よりよかった。ようやったな！」と声をかけてテストの結果を返す清水社長。　4 社長直筆の標語。社内の至るところに貼られている。

ある程度読み書きできるようになったとき、たまたま会社を辞めた子が自分で作ったプリンやクッキーを持ってきたんです。私は「お菓子作るの好きか？」てその子に聞いたら「大好きです！」と返ってきたので、「そうか。ほなみんな喜んでるし店しよか。お客さんにお金貰いながらできたらええなぁ」って言うと、「それええ！」「ほな僕うどんつくる！」「私カレーつくる」と驚くほど盛り上がったんです。それで私は「よっしゃ！楽しいなあ。けど店するんやったら国家試験受けて調理師免許取らなあかん。どないする」と聞いたんです。彼らは「難しいそうやなあ」。私は「そやな。社長でも難しい。けどやったらできるんちゃうか」って。ちょうど事務員たちが使った調理師免許の本が近くにあって手にしたらだいぶ分厚い（笑）。しかし、彼らに本を見せて「みんな頭悪ない。ただ勉強せんかっただけやからできるぞ。本買おう。ワシ、アマゾンで頼んどくからお金出せよ」って。しかし、すぐにその子たちの両親から「社長、子供が『本代』って来ましたけど絶対無理です。何考えてるんですか！」と怒られました。私は「親がそんなこと言うてどないするんですか。子供の頭悪い悪いと言わんとってください。国家試験にみんな意欲をみせてるんです。悪いことやないから挑戦させてくれませんか。僕がずっとついて教えます。この子らはただ勉強せんかっただけで頭悪ないんです」とお願いしました。なんとか親御さんも納得してもらい、試験勉強がはじまりました。

「2年かけて勉強するからな。1年で調理師免許の本全部読むで。1日に1ページや。大体300ページやから1年で終わる。あと1年は問題集しよ」がスタートです。ところが大変、1ページを読むだけでも5〜6時間かかる。勉強してたといっても参考書は難しい。しかし、ある子が使い方もわからんのに自主的に辞書買ってきたんです。そしたら1人また1人と。それでみんなで辞書も買いにいきました。彼らは辞書の引き方分からんのですが、偉いのは強制的にでなく興味持ってるから1回教えたらすっと辞書の引き方覚えるんです。1年目は1ページ毎に辞書で漢字調べてルビを振り、本読みをしたんです。それで今は問題集と模擬テスト。素晴らしい子がでてきましたね。いつも満点とる子が。さすがに驚いて聞いてみたら、どうやら家帰っても3、4時間勉強して本の内容をまるごと覚えているみたいなんです。凄いですよ。



「貴世満」の従業員は日記を書いて社長に提出する。清水社長はそれを読み、心あるコメントを書いて直接返す。みんなが楽しみにしているひととき。

挑戦させることが使命

彼らの考え、姿勢を本当に理解すれば、チャレンジさせることが私たちの使命だと気づくんじゃないですか。だから今回はまだだれも成しえたことのない調理師免許をとらせて、我々が管理せずに彼らだけでお金を稼げるようなシステムをつくろうとしてるんです。まだ具体的じゃないですが、よくある健常者と障がい者が一緒にするお店やないんですよ。まるっきり「貴世満」の子だけで火も使い、包丁も使い、お客さんを接客する店です。そんなことできるんかどうか。これがチャレンジですよ。できたら他がやってることがひっくりかえりますよ。国にも意見できるんじゃないでしょうか。また、私は不可能だと思ってません。人間が本気になったとき、200%、300%のエネルギーが出るんですよ。障がいのあるなしとか関係ない。「天は二物を与えず」っていいますよね。「金平糖」なんですよ。砂糖菓子。角ばっかりですよ。角は長所、へこんでるところが短所。人間には金平糖みたいに長所、短所がいっぱいあるんです。へこんでるところが少しでも目立ったらそれを社会は一把絡みで「できない」として、なにもさせない。そしたらその子たちはもう人間らしく生きることができない。何もさせないことが健常者の使命じゃないんですよ。そりゃ試験に落ちるかもしれません。しかしそれで彼らは生きている証を感じることができると思います。落ちたらまた頑張って試験受けたらええ。いっぱい経験して一緒に成長していくのが会社であり社会なんじゃないですか。